

# 鹿島の歴史を歩こう



〈鹿島城赤門〉

鹿島地区は、鹿島川と石木津川に挟まれた地域の海岸近くに位置します。地理的には、中川や石木津川の堆積によって作られた扇状地、多良岳丘陵の末端に位置する高津原台地、その先の有明海沿岸の干拓などによって造られた低湿地の3つの地形から成り立っています。

鹿島地区は現在の鹿島市の中心となる市街地で、人口密度が市内で最も高い地域ですが、市の歴史の中では比較的新しく、江戸時代末期以降に発展した地域です。

新町や中牟田などの中心商店街などが発展したのは、1807年(文化4年)に北鹿島の常広から高津原に鹿島鍋島藩の鹿島城が移転してからと言えるでしょう。移転直後に作られた絵図を見ると、高津原の城の周りにはあまり家がなく、新町の多良海沿いにわずかに町が作られていたのがわかります。大手や東町なども田や畑でした。当時の大きな町は元の城下町である北鹿島の本町周辺でした。しかしながら町の大きさが現代まであまり変わらなかった本町に比べて、新町・中牟田の中心商店街や大手や東町などの住宅街は、明治大正時代以降に急速に発展していきます。また戦後以降は高津原台地や大字納富分地域が新興住宅地として発展します。一方大字重ノ木は、ほぼ全域が干拓によって造られた土地で、広大な耕地が広がりますが、近年は宅地として開発が進みつつあります。

それぞれの地域に特色のある歴史や文化、鹿島鍋島藩にゆかりのある遺跡、そしてそれらにまつわる神社やお寺があります。これらの歴史をたずねてみましょう。



## アクセス ACCESS (鹿島市役所まで)

### 【車でお越しの場合】

◆佐賀市内より……………約45分

### 《高速道路(長崎自動車道)利用》

福岡市内……………北鹿島……………長崎市内……………武雄・北方I.C下車……………約30分  
 約100分……………約60分……………嬉野I.C下車……………約20分



### 【JRでお越しの場合】

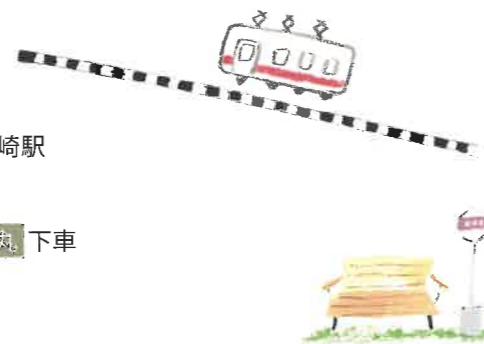
◆JR長崎本線肥前鹿島駅下車……………徒歩約20分

### 《JR特急+祐徳バス利用》

JR博多駅……………JR肥前鹿島駅……………JR長崎駅……………約60分……………約60分

鹿島バスセンター……………乙丸下車……………約10分

佐賀方面に乗車



# 城内



城内区はその名の通り、鹿島城の「城内」という意味ですが、太平洋戦争前は「郭内」と呼ばれていました。それでは、文化4年(1807)に鹿島城が常広から移転する前はどんな地名だったのでしょうか。記録によると高津原村の一部で、尾崎村という地名だったようです。鹿島城は鹿島鍋島藩の居城ですが、2万石の小規模な大名にしては広大な敷地を持ちます。城は主に土塁によって造られ、城内の四方4箇所に門が設けられていました。正面の門である大手門から本丸の赤門まで鍵形の折れ曲がった大手道が続き、道の両側には位が高い家臣の武家屋敷が建並んでいました。城内の字は柏・田代の2つです。



## 1 鹿島城

現在の鹿島高校の敷地にあった鹿島城は通称で、正式には城ではなく、「高津原屋敷・高津原陣屋」と呼ばれていました。鹿島鍋島藩の城は北鹿島の常広(現在の北鹿島小学校)にありましたが、度重なる水害に耐えかねて、幕末に高津原に移転しました。文化3年(1806)に地鎮祭が行なわれて、文化4年(1807)に完成しました。翌、文化5年に赤門が完成していますので、完成したといっても、おそらくは城全体の築城の土木工事だけだったのでしょうか。築城のほとんどは土塁と堀によるもので、石垣は限られた場所だけでした。土塁には大きな柵が設けられていました。城の範囲は現在の城内地区と同じです。城の周囲の正面に「大手門」、裏に「搦手門」、東西に「東門」と「西門」が造られました。大手門から入城すると赤門まで鍵形に折れ曲がった登城道が続き、両側には家臣の屋敷が並んでいました。道の曲がり角には現在でも防御のための土塁が残るところがあります。本丸の建物は明治7年(1874)の佐賀の乱の混乱で、鹿島藩士自らが火を放ち赤門を残して炎上してしまいました。



## 2 赤門

鹿島城赤門は正式には高津原屋敷表門です。棟札によって鹿島城が造られた翌年の文化5年(1808)につくられたことがわかります。門の構造は「薬医門」という型式で、赤く塗られているために「赤門」と呼ばれていますが、城の門が赤く塗られている例は和歌山城の1例のみが知られているだけで非常に珍しいものです。また屋敷門が赤く塗られている例は、東大の赤門(旧前田家上屋敷門)が有名ですが、この赤門は將軍家から妻を迎えた場合につくられる御守殿の門という特別な門ですので、鹿島城と事情が異なります。鹿島城赤門は現在は鮮やかな朱色で塗られていますが、元は鈍い赤色、いわゆる「ベンガラ色」で塗られていました。しかしながら、当初から赤く塗られていたのか、そしてどうして赤く塗られているのか、よくわかっていません。昭和33年に佐賀県重要文化財に指定されています。



### 3 大手門

大手門は城の正面入口の門のことで、赤門とともに鹿島城の貴重な遺構として佐賀県重要文化財に指定されています。この門は城門としてよく使われている「高麗門」という型式で、通常は扉を開けたままにしておく門です。この門は元は黒く塗られていた門でしたが、昭和27年に現在のように赤く塗られました。



### 4 松蔭神社

松蔭神社は山口県の萩市にある吉田松陰をまつた「松蔭神社」が有名ですので、混同されやすいのですが、全く関係は無く、鹿島鍋島藩の歴代藩主をまつた神社です。寛永10年(1633)に鹿島藩初代藩主鍋島忠茂を常広城内に忠茂大明神としてまつたのが始まりと言われます。常広から鹿島に移った際に鹿島城内に移され、さらに明治3年(1870)に現在の地に大きく社殿が造られました。



### 5 旭ヶ岡公園

旭ヶ岡公園は鹿島藩第13代藩主の鍋島直彬公が文久2年(1862)に松蔭神社の境内の一角に多くの桜を植えて「衆楽園」と名付け、人々に開放して毎年観桜の宴を開いて楽しんだことを起こりとしています。明治20年(1887)には大手門から赤門までの登城路沿いに植えられた桜並木は桜のトンネルと呼ばれています。また大正3年(1914)には九州ではじめて夜桜が見られるよう電飾の設備が設けられ有名になりました。大正10年(1921)には松蔭神社の境内だけでは狭くなったため、赤門の正面右側が整備され、旭ヶ岡公園と名付けられました。公園内には様々な祈念碑や銅像などが建てられています。



### 6 信福寺

元は現在の鹿島高校の体育館付近にあったといわれますが、鹿島城ができたときに、現在の場所に移転したと伝えられます。開山は室町時代の永禄2年(1559)にさかのぼります。明治初年に火災で廃寺となりましたが、平成元年に再興されました。寺には本尊として一木造りの木造菩薩立像が安置されています。室町時代の肥前に特徴的な様式をよく残す作例として鹿島市重要文化財に指定されています。



### コラム 「くにゃきょう」の伝説

旭ヶ岡公園の招魂碑の近くに「くにゃきょう」とよばれる石碑があります。この石碑にはちょっと恐ろしい伝説があります。江戸時代より前のころ、このあたりに「宮内卿」という修験者(山伏のこと)がいました。その妻は大変美しい人だったのですが、当時の領主だった納富但馬守はその美しさに惚れて、奪って自分の妻にしまいました。宮内卿は荒れ狂い、毎日町に出ては魚や酒を自分が思うままに奪い取るようになってしまいました。人々は哀れんで「暴力と権力があれば人の妻でさえ奪い取ることができる。それに比べると品物のようなものであれば仕方がない」とあえて止めませんでした。それでも人々は困って、宮内卿が来るのが見えると大きな魚には菰をかぶせて隠していました。但馬守は家来に命じて宮内卿を捕らえようとしたのですが、神出鬼没でしかも力が強く捕らえることができませんでした。

ところが宮内卿は「おこり」を患っており、「おこり」の発作が出て寝ているところを但馬守は襲いました。宮内卿はまさに斬られようとする時、「自分は「おこり」に苦しむことがなければおまえたちに捕らえられることはなかった。自分の死後自分と同じように「おこり」に苦しむ人が自分を祈れば必ず治してやろう。」と言って死にました。人々は石碑を建てて宮内卿をまつりましたが、大変に靈験がありました。しかし但馬守の子孫が近くを通るときには、権力を示して石碑を打たないと権力が衰えたと知って子孫に「たた」を起こした、と言われています。

※「おこり」 悪性の流行病

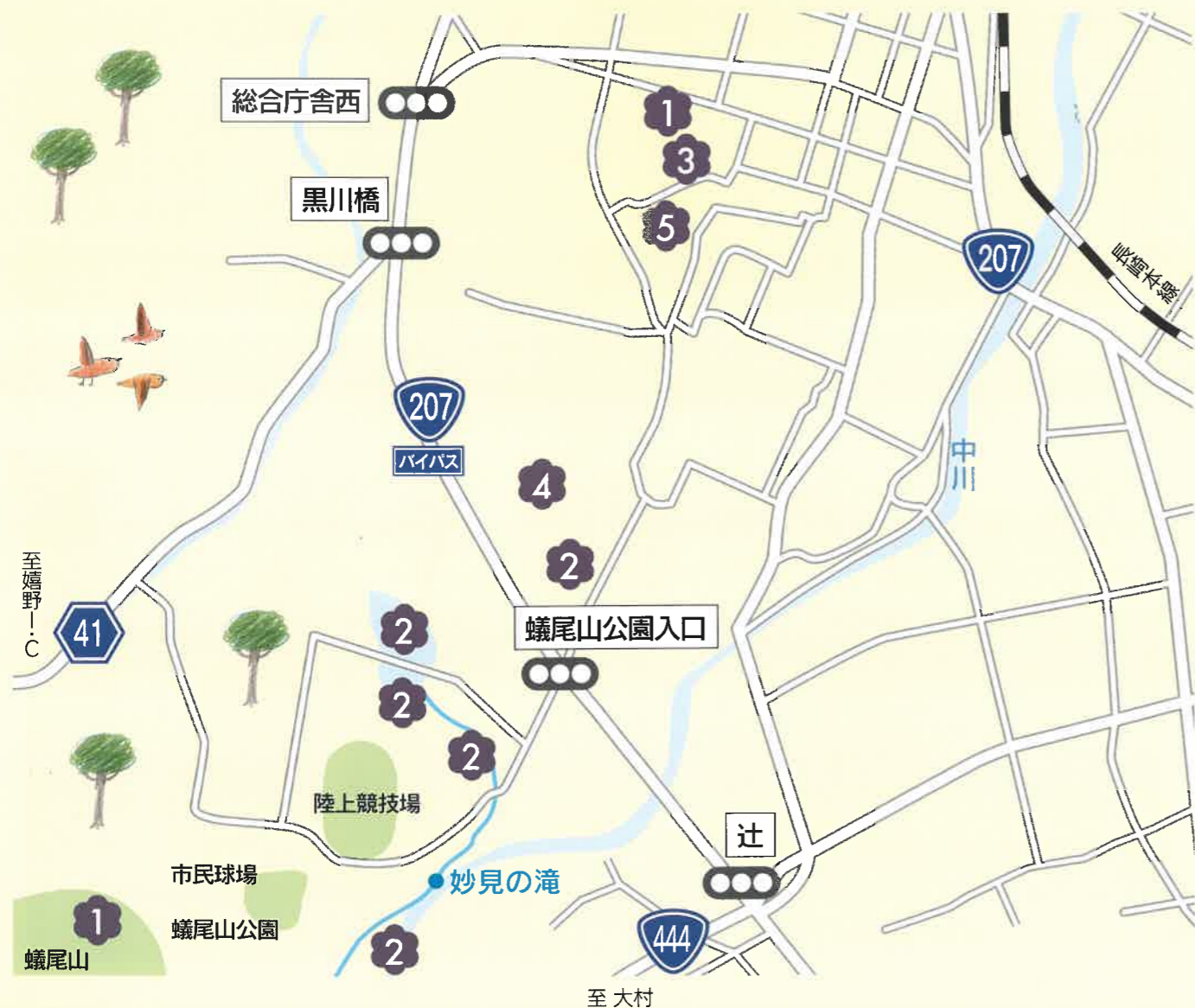


# 高津原



高津原は、江戸時代の初めまでは尾崎村・東ノ谷村・中ノ谷村・西ノ谷村に別れていました。「高津原」という名称は台地一帯の通称だったようです。江戸時代後半には高津原村となっています。「高津原」という名称の由来は、「港(津)の高いところにある原(荒れ地)」という意味ではないでしょうか。当時、鹿島川の河岸は鹿島の重要な港でした。高津原の台地上には大きな河川がなく、あまり土地の利用がない場所だったので、このような名まえが付いたのでしょう。高津原台地が田畑として開発されるのは、寛文年間(1661~73)に鹿城川と数多くの堤が完成してからです。なお大字高津原(旧高津原村)は明治4年に高津原村・西牟田村・新町・中牟田村・横田村・片山村(現在は若殿分の一部)が合併したものです。

高津原の字名には、よろいだ かんのかん こうす たひら わしのす にし たに やくし おにつか いっぽんがき た そえ なかのたに 鑑田・観音・甲冑・田平・鷺巣・西ノ谷・薬師・鬼塚・一本柿・田副・中谷・かきのき にしみね にしざか えいせいじ たにがしら さかくち われいし い でぐち ひろせ みねぼう すぎもと つじ うめ き みょうけんぶち 柿木・西峰・西坂・永清寺・谷頭・坂口・破石・井手口・広瀬・峰坊・杉本・辻・梅ノ木・妙見淵・うえ あり お なかみぞ く ほつみ くんざか みなとざか たにこし まつ おたに くらたに さこんだに 上・蟻尾・中溝・久保堤・郡坂・湊坂・谷越・松尾谷・闇谷・左近谷があります。



## 1 蟻尾城と鷺の巣城

高津原には中世の城が2箇所にあります。蟻尾山の山頂には室町時代にこの地方を支配していた大村氏によって「蟻尾城」が、鷺の巣には室町時代の終わり頃に、この地方を支配していた有馬氏によって「鷺の巣城」という小規模な城が造られていました。高津原は白石方面や塩田方面から攻め入る敵を見張り、防ぐための重要な拠点でもありました。



蟻尾城



鷺の巣城

## 2 鹿城川と堤

鹿城川は、「川」と付いていますが、江戸時代の寛文年間(1661~1673)に造られた人工の水路です。高津原の台地には川がなく、また降った雨も台地から流れ出してしまうために、田畑が造れず荒れた土地でした。この高津原を開発するため、鹿島藩主鍋島直朝公は家臣に、人工の川と水を貯める堤の建設を命じました。中川のはるか上流の西三河内から延長3.5kmにわたり幅1.5mの水路を2年もの歳月をかけて工事を行いました。水路は勾配が非常に緩やかで、さらに蟻尾山の中腹の岩盤を掘り進める難工事でした。台地上には杉本堤・濁堤・西堤・観覧(瀾)堤など数多くの堤が造られ、高津原の台地を潤しました。堤が満水で必要がない水は若殿分で「妙見の滝」となって中川に戻ります。現在では水田が減ったため、いくつかの堤はその役割を終えて埋め立てられています。



## 3 思瓊神社

思瓊神社は鷺の巣城の跡地に造られた鹿島藩主の鍋島直朝公をまつた神社です。「思瓊」とは直朝公の神号です。高津原の人々にとって直朝公は(「鹿島川と堤」参照)、荒れた高津原台地を緑の水田に変えた大恩人です。人々は直朝公を神に等しい人として敬い、いつまでも忘れることがないように「思瓊神社」を創ってまつりました。



#### 4 天満宮(高津原)

天満宮は鹿島でもっとも多くつくられた神社です。どの集落にも必ずと言っていいほど天満宮がつくられています。よく知られているように天満宮には菅原道真公すがわらのみちざねがまつられています。現在では菅原道真公は勉学の神様として有名ですが、本来はたたき神で怖い神様です。道真公を怒らせて集落に様々な災い(たたき)が降りかからないよう、菅原道真公を丁重ていちょうにおまつりしたのです。天満宮には文官ぶんかんの座像姿の石造が本尊としてまつられています。天保15年(1844)の銘があります。



#### 5 幽照寺

幽照寺は貞享2年(1685)鹿島藩主鍋島直朝公の第3子「文丸」が幼くして亡くなったため、母の萬子姫まんこひめがその菩提ぼだいを弔うため浜町に造ったお寺です。その後浜のお寺が荒廃したため、この地に元々あった地藏庵というお寺が、昭和8年に寺



号を継承しました。境内の小堂内には江戸時代の牛津砥川の石工の名工「平川与四右衛門」が作った石造の地藏菩薩とがわ よしえもん半跏像(市指定重要文化財)が安置されています。



昔の写真① 新町さくら通り



昔の写真② 新町前山薬局前

## 大手・東町



「大手」とは城の正面のことです。鹿島城の正面の大手門の前から付いた名まえです。東町は大手町の東にあることから付けられた名まえでしょう。いずれも鹿島城ができてから付けられた名まえです。鹿島城ができた直後の絵図を見ると、新町の街道沿いには町並みがありますが、大手や東町にはまだ家屋はありません。明治年間の地図を見てもまだ家屋は少ないようですが、大正6年の地図では現在のように市街地化していることがわかります。大手・東町の字は「熊三郎くまさぶろう」のみです。



#### 1 観音堂

大手通軍人会という組織が大正12年(1923)に建立したものです。小堂に石造の聖観世音菩薩像が安置してあります。毎年8月17日に夏祭りが行なわれています。



# 新町



新町とは文字のとおり新しい町という意味です。北鹿島の「本町」(「本」には「元」という意味があります)に対する「新町」という意味で付けられました。文化4年(1807)に鹿島城が常広から高津原に移転したことで、新たな城下町が鹿島川の南側の旧多良海道沿いにつくられました。そのため新町地区は海道沿い両側の細長い地区となっています。新町となる前は西牟田村と中牟田村に属していたと思われます。新町の字名には、一本杉・一本松・二本柳箆・柳箆の字名があります。道の東側に干拓の地名を指す「箆」が付く地名が並んでおり、多良海道は中世以前には当時の海岸線に沿って作られた、まさしく海の道であったのではないかと考えられます。



## 1 新宮神社

新宮神社は、鹿島城の高津原への移転に伴い、北鹿島から移されたと考えられます。石祠には天満宮の文字があり、また鳥居にも天満宮の文字があるので本来は天満宮と思われます。祭神は菅原道真公だと思われます。琴路神社の下宮になっており、11月2日の夜には神輿がこの神社までお下りをして宿泊し、翌3日に琴路神社に帰ります。ただ新宮神社は琴路神社と祭神が全く異なります。記録によれば明治の終わりのころに、下宮に定められたようです。



## 2 鹿島稲荷

現在の鹿島稲荷のお宮は大正年間に発生した洪水の後、溝の中から「稲荷大明神」と刻まれた石祠の一部が発見され、御神体としてまつられたことから始まると言われます。現在の社殿は、昭和24年に炎上した祐徳稲荷神社が昭和32年に再興された際に、その余り材をもらって改築されたものです。この鹿島稲荷のある前の通りは「稲荷通り」と呼ばれ周辺の住民の人たちに篤く信仰されています。



## 3 観音堂

本尊は清水観世音菩薩です。由緒など詳しいことはよくわかりません。



## 4 大師堂

大師堂は本尊は弘法大師で、真言宗のお堂であることがわかります。門柱に「鹿光山」「大正15年8月吉日 誕生院第2世正盛敬書」とあり、大正2年に復興された行成の誕生院と深い関わりがあったことがわかります。



# 中牟田



中牟田の「牟田」とは「湿地・沼地」や「干拓地」を表わす言葉です。「中」は真ん中という意味で、西牟田に対する中牟田と思われるので、昔は東牟田という地名もあったのでしょうか。中牟田という地名は江戸時代の元禄絵図(1688~1703)でも確認できます。中牟田には横沢よこざわ籠かご・薬師籠やくし・柳籠りゅう・松籠まつ・古川籠ふるかわ・竹たけの字名があり、「籠」が付く地名がずらりと並びます。このことから中牟田は干拓地であった可能性が高く、また江戸時代の前期には村が成立していることから、中世にさかのぼる古い干拓地であることが推定できます。新町のところで書いたように中牟田の西側に沿って旧多良海道が伸びていることもこのことを裏付けます。



## 1 大神宮

大神宮とは伊勢神宮のことです。祭神は天照大神です。旧多良海道沿いにあり、中牟田区の中心的神社です。境内には「弁財天」「稲荷大明神」「猿田彦」「庚申塔」などの石祠が並びます。



## 2 善徳寺

善徳寺は浄土真宗のお寺です。山城国(現京都府)から来た西河十藏行春によって天正年間(1573~1591)に北鹿島中村に作られました。寛永17年(1640)に本山から木造仏像と寺号をもらって善徳寺となりました。昭和2年に北鹿島から現在の場所に移りました。



# 西牟田



西牟田は高津原の台地と鹿島川に挟まれた低湿地の地域です。「牟田」とは「湿地・沼地」や「干拓地」を表わす言葉で、中牟田の西にある牟田という意味だと思われます。西牟田は干拓ではなく「湿地帯・沼地」の意味でしょう。大雨の際、高津原からは西牟田地区に雨水が流れ込みますが、鹿島川が満潮の時などは排水が悪く、鹿島川沿い一帯が洪水常襲地域となっていました。そのため以前は住宅はやや小高い二本松通り周辺に集中していました。現在はポンプ場ができたことで洪水が減り、地域全体が市街地化しています。西牟田には黒川・島山・黒木・三本松・西峰・久保・二本松・四本松・五本松の字があります。



## 1 天満宮(西牟田)

西牟田の天満宮は、貞享元年(1684)吉牟田五郎兵衛藤原利房が「天満宮」の石祠を寄進したことによって造られています。祭神は菅原道真公です。他に稲荷神社と水神がまつられています。



## 2 薬師寺

元の総合庁舎付近にありましたが、総合庁舎の建設に伴い現在の場所に移転しました。火災のために記録類が焼失したために由緒などはわかりませんが、文中3年(1374)に創建されたと伝えられます。ここでは西国33カ所観音霊場の札所が設けられ、それに関連する石塔多数や十六羅漢像のうち数体が残存しており、元は大きなお寺だったことがわかります。



## 3 不動堂

この地が鹿島の歓楽街として発展した大正4年(1915)頃に造られたといわれます。由緒はよくわかりませんが、毎月28日に誕生院がお経を上げており、誕生院の本尊もことごとく不動明王です。誕生院との繋がりがあると考えられます。



# 横田



横田という地名は江戸時代前期の文書に「横田村」として出てきます。横田の地名の由来はよくわかっていません。「川の横の田んぼ」という意味かもしれません。横田は道祖・嵐町・前田の字があります。



## ① 天満宮(横田)

横田の天満宮は中川沿いにあります。天満宮が川沿いに造られている例は多くあります。これは天満宮が「たたり(災いすべて)」を沈める願いで造られる神社ですが、中でも河川の氾濫は大きなたたりの一つでした。そこで河川がたびたび氾濫する場所に天満宮を設置して、たたりを鎮めようとしたのでしょう。境内には弁財天・地神・不動尊・大権現・八天狗・豊倉神社など災いを避けたり、豊作を願う神様の石塔や句碑なども建てられ、この横田の天満宮は地区の信仰の中心となる神社となっています。



## ② 本長寺

本長寺は日蓮宗のお寺で、慶安3年(1650)に佐賀にあったお寺を久布白三左衛門兼鎮がこの地に移し、開山は日寿上人として創建したと伝えます。境内には一字一石経(小石一つにお経の文字1字づつを書き、地下などに納めたもの)の石塔や日寿和尚の天和元年(1681)の開山塔などがあります。またお寺ですが、稲荷大明神の石祠も建っています。



# 若殿分



鹿島市には「～分」という地名が多くあります。この地名は中世の戦国時代にさかのぼる古い地名です。「分」とは、「私の分」「あなたの分」と言うときに使う「誰々のもの」という意味です。つまり「若殿分」とは「若殿様の分(領地)」という意味と思われます。室町時代に鹿島を納めていた大村氏の領主や家来の土地所有の地名が現在まで残ったものです。現在の若殿分は大字高津原(旧高津原村)に属する部分(中川の北側。旧片山村)と大字納富分(旧納富分村)に属する部分(中川の南側)があります。若殿分の字には、大字高津原に属する下河原田・川原田・山下・薬師・岩下・井手坂、大字納富分に属する菊園・銀鑄堂・長円・扇子・堤・妙見・道祖・岩屋・小路・坂口・井手坂があります。



## ① 琴路天満宮

御神体の石祠には「天満大自在天神」と刻んであります。祭神は菅原道真公で、石祠のために石段を高く積んで築いた立派なものです。境内には延宝5年(1677)の大神宮(伊勢神宮)の石祠もあります。



## ② 長徳寺

長徳寺は浄土宗の寺で寛永元年(1624)に塩田の本応寺の宝誉和尚を開山として正覚寺として創建されました。ところがその後荒廃したため、鍋島直朝公は寛文5年(1665)に佐賀郡南里村正定寺の超誉上人にお願いして長徳寺として再建しました。境内には天正16年(1588)の銘がある六地藏があります。この他に慶長19年(1614)の庚申塔、元和9年(1623)・寛永2年(1625)・寛永3年(1626)の予修碑など戦国時代～江戸前期の古い石造物があります。





3 しょうごんじ 莊嚴寺

莊嚴寺は浄土真宗の寺で、摂津国有馬郡(現兵庫県)の池田という人物が、慶長3年(1598)に本山の本願寺から正教寺の号と画像の本尊をもらって創建されました。開基は慶安です。元禄14年(1701)に現在の莊嚴寺に寺号が改められました。



4 もんじゅどう 文殊堂

文殊堂という名まえのとおり、学問を司る文殊菩薩を本尊とするお堂と思われませんが、境内に文殊菩薩に関するものはなく、天正10年(1582)の銘がある自然石塔の墓石や天正12年(1584)の念仏講の石碑などがあり、中世末に栄えたお寺だったと考えられます。



コラム かたやまきょうつか 片山経塚

旧片山村に属する蟻尾山の斜面から、昭和35年(1960)にみかん園の造成工事中に経塚が発見されました。日本の仏教には平安時代の永承7年(1052)以降仏教がすたれる「末法」という世の中になるという歴史観があり、遠い未来に弥勒菩薩が世の中を救うときまで経典を残そうという考えから、お経を地中に保存する「経塚」が全国で数多く造られました。片山経塚もその一つで、山の斜面の等高線沿いに、径1.5m高さ45cm石積みで、2.4mの間隔で並んでいました。経塚はお経が、滑石製や青銅製、陶器製の経筒に入れられ、鉄の刀などと一緒に埋められていました。平安時代は蟻尾山をはじめ、多良岳山麓全体が密教の修験道場となるなど、仏教文化が栄えた場所でしたので、このような遺跡が残されたのでしょう。



片山経塚

納富分



納富分も若殿分と同じく中世の戦国時代の太田氏に因む地名に由来します。納富分とは「納富氏の領地」という意味と思われ、「納富分村」という名まえは江戸時代の郷村帳などの史料にそのまま出てきます。納富は佐賀県に多い名字です。ちなみに大字納富分(旧納富分村)は明治4年に若殿分村・納富分村・行成村・執行分村・末満(光)村・馬渡村・井手分村が合併したものです。納富分の字名としては琴路・名子・前田・永吉良・馬場・印鑰・島田・木ノ宮・久保・廣瀬があります。



1 ことじぐう 琴路宮

琴路宮は長禄3年(1459)に三嶽神社の中宮として創建されたとされます。行成の琴路神社は縁起に、仁治2年(1241)に中川上流の三嶽神社から琴を流して流れ着いたところに下宮として創建したという記述があり、当時は琴路神社のかたわらを中川が流れていたと思われます。その後、中川の流が現在のように大きく変わったと思われますが、三嶽神社も琴路神社も水の神様ですので、川の近くに神社を置く必要があったために、この琴路宮が造られたのではないかと考えられます。



2 きのみや 木宮

木宮の祭神は「句句迺馳神」といわれ、木の神様の総称とされます。そのため「木宮」と付いていると思われませんが、「木」が「紀」に通じるとして、奈良時代に藤津地方を治めていたと思われる紀氏に関連する遺跡ではないかという説もあります。河上神社に残る正応5年(1292)の文書には4丁(約4ヘクタール)の領地を持っていたことが書かれているので、平安時代には格の高い神社であったことがわかります。



3 いんにやくてん 印鑰天神社

「印鑰天神」とも言われますが、菅原道真公をまつります。「印鑰社」とは郡衙(郡の役所)などの印や役所の蔵の鍵を納めておく神社を指しますので、「藤津郡衙」と関係が深い神社であった可能性があります。貞和6年(1350)の印鑰天神に関する記録がありますので、平安時代にさかのぼる古い神社であることは間違いなさそうです。



昔の写真③ 鹿島駅



昔の写真④ 中川橋

ゆきなり 行成



行成は江戸時代の史料には「行成分村」あるいは「行成村」の2つの異なる名まえで出てきます。「分」が付くのが本来の地名であれば「行成氏の領地」という意味になります。「行成」という姓は長崎県や諫早市などに存在するので、その可能性はあります。戦国時代の終わり頃は末光とともに「深木村」と呼ばれていたこともあります。現在の行成は江戸時代の史料によると行成村と今手川村が一緒になってできたようです。今手川村の範囲はよくわかっていません。地区内に古墳時代の鬼塚古墳や興教大師が生まれた地と伝えられる「誕生院」、寛運ゆかりの「橘園」などの遺跡があり、古墳時代から平安時代の鹿島の中心地であった可能性が高い地域です。行成には鍛冶屋瀬・番田・天神・鬼塚・誕生院・柿木・福寿院・園構・八杖・新道・地蔵の字があります。



1 鬼塚古墳

鬼塚古墳は琴路神社の北側にありますが、周辺には他にも数多くの古墳があったと伝えられます。石室は全長16.2mの巨大なもので、特に石積みの1段目は、大きな安山岩を使った巨石墳とよばれるもので、ヤマト朝廷の墓制の影響を強く受けた古墳です。墳丘は直径30m高さ5mの円墳ですが、築成当時はもっと大きかったと考えられます。巨石墳として全国的に有名なものは、奈良県の蘇我馬子の墓ともいわれる石舞台古墳がありますが、それと同じ7世紀の古墳です。奈良時代に編纂された「肥前風土記」には、藤津地方には「土蜘蛛(地方の豪族か)」がいて、ヤマト朝廷に従わなかったが、攻めて降伏させたことが書かれています。この内容と、7世紀以前にはヤマト朝廷の影響を受けた古墳は発見されていないことを考えると、鹿島地方は6世紀末頃にヤマト朝廷の支配下におかれた可能性ががあります。



2 誕生院と興教大師覚鑿

誕生院は真言宗の復興につくし、新義真言宗の開祖となった、興教大師覚鑿の生誕地に造られたお寺です。覚鑿上人は平安時代の嘉保2年(1095)に、この地で生まれたと伝えられます。父は伊佐平次兼元、母は橘氏の娘といわれます。当時この地は京都の仁和寺の荘園で、中央との交流があり、覚鑿は13歳の時に京都に上がり真言宗を学びました。その後高野山を復興し大きな力を得ますが、真言宗内の対立によって高野山を追われ、紀州の根来寺に移ります。この地で新義真言宗を興しますが、康治2年(1143)に亡くなります。誕生院は応永12年(1405)に足利義満の発願により根来山大伝法院の末寺として創建されましたが、江戸時代の頃にはすっかり荒廃し、地名が残るだけになっていました。大正2年(1913)に鍋島直彬公ら地元の有志によって復興事業が行なわれ、大正10年(1921)

に落慶式が行なわれました。寺にはこの時に和歌山の根来寺から譲られた鎌倉時代～南北朝時代の作である覚鑿上人座像などの寺宝が納められています。



興教大師覚鑿像



誕生院

3 橘園と碁聖寛蓮

誕生院の北方に「橘園」と呼ばれる場所があります。鹿島藩主鍋島直條は『鹿島志』のなかで、橘園は橘氏にゆかりのある場所で、囲碁の名人で歌人でもあった橘良利(寛蓮)の旧居ではないかと述べています。橘良利は『花鳥余情』に「藤津郡大村の人で、出家して寛蓮という。宇多天皇に仕えて、碁が上手であったので碁聖という。延喜13年(913)に碁式(碁のルール)を作って天皇に提出した。」ことが書かれています。「碁聖」とは傑出した囲碁の名人に対する尊称で、囲碁のタイトル戦の名称にもなっています。また寛蓮は平成28年に日本棋院の殿堂入りをしています。誕生院の項でも紹介したように覚鑿上人もまた橘氏ゆかりの人物です。



佳人の変化と対局する寛蓮 (『今昔物語集』より)



4 琴路神社

琴路神社は水と日と稲の神様をまつる農耕の神様です。縁起には鎌倉時代の仁治2年(1241)に、西三河内の三嶽神社から琴を流して留まった所に下宮を造った、という伝説があります。当時は琴路神社のそばを中川が流れていたと考えられ、また川の跡も確認できます。祭りとしては11月2～3日に行なわれる例大祭は特に有名です。御神幸行列は獅子・しめぶり・先払い・神輿の順に出発し、琴路宮を経て新町の新宮神社に到着し泊まります。翌日の帰りは神輿の後に馬が付き、馬と神輿が先を争って琴路神社の神前に入ろうとします。その後馬は神殿の回りを何周も走りますが、これを「馬かけ」と呼んでいます。お供に付く獅子舞と剣突きも特色のある民俗芸能です。その他の祭りとして、立春から210日の前後に「通夜」と呼ばれる台風よけを祈願して「風日どもり」が行なわれ、氏子の各地区が浮立を奉納します。



5 天満宮(行成)

行成の天満宮は行成公民館にあります。お宮は無く、天満宮の石祠や天照大神・金比羅大権現・鹿嶋大明神・豊受大明神・庚申塔・八天狗などの石祠が並びます。



6 耕月寺

耕月寺は臨済宗の寺で、寛元元年(1243)に聖一国師大和尚を開山として建立されたと伝えられます。昭和9年に現在の寺号に改められました。



# しまょうぶん 執行分



執行分も「分」という文字が付く地名です。中世の大村氏に因む地名で「執行氏の領地」という意味だと思われます。「執行分村」も江戸時代の史料にそのままの名まえで出てきます。「執行」という姓は福岡・佐賀・長崎に多い姓です。執行分区の土地は本来の執行分だけでなく浜の石木津川沿いの干拓地に飛び地があります。これは区が資金を出して干拓事業を行なったためと思われます。執行分の字名にはむくまち ぎんぶち おにまる ふなまつ じほう こごもり てんじん 棕町・琴淵・鬼丸・船松・地宝・小籠・天神があり、浜町の中に飛び地としておおごもり しんごもり よしむら しお い 大籠・新籠・吉村・潮井があります。



## ① 天満宮(執行分)

執行分の天満宮は社殿がなく、境内には石祠が建並びます。石祠で最も古いものは延宝9年(1681)の天満宮の石祠で、えんぼうこの他に大神宮・豊倉大明神・八天狗などの石祠があります。



## ② 水神堂

執行分の飛び地の石木津川の堤防上にあります。堂内の石祠には水天宮・一条大明神の石塔が納められています。水難防止の願いのために造られたのでしょうか。



## ③ 泉堂

泉通りには「泉堂」というお堂があります。本尊いずみじぞうがんおうぼさつは泉地蔵願王菩薩です。泉通りはその名のとおり、泉が湧く通りです。中川は大木庭あたりから典型的な扇状地を形成しています。扇状地は水が地面の下にもぐ潜りやすく、潜った水(伏流水)は泉通りあたりで自然に泉となつて湧き出します。泉堂はこの豊富な泉の水に感謝して建立されたものでしょう。



# 井手分



井手分も「分」という文字が付く地名です。中世の大村氏に因む地名で「井手氏の領地」という意味だと思われます。「井手分村」は古い地名であるために江戸時代の元禄肥前絵図げんろくひぜんえず(1688~1703)にも記載されています。井手の姓は全国にありますが、特に福岡・佐賀・長崎に多い姓です。江戸時代の終わり頃の史料には井手分村が南北に別れていた記録があります。井手分の字名にはさんのお かね す すぎ のぼたけ 山王・鐘頭・杉・野畑があります。



## ① 山王社

山王とは、滋賀県の比叡山の麓の日吉大社で信仰される神様の別名で、山王社は日吉大社の末社です。山王信仰は山岳信仰のひとつといわれます。山王社には現在では天照大神や竹下大明神などの石祠がまつられています。



## ② 観音堂

観音堂は井手分公民館の場所にあり、昭和初期までは「天神さん」あるいは「観音さん」と呼ばれるお堂があつて、千灯籠が奉納されていました。現在では天氏宮・八天狗などの石祠が残されています。



昔の写真⑤ 旭ヶ岡公園の花見風景

# 末光



末光は元文3年(1738)作成の郷村帳に「末光村」の記載があります。末光の地名の由来はよくわかりません。戦国時代の終わり頃は行成とともに「深木村」と呼ばれていたこともありま  
す。「末満」の字が使われることもあったようです。末光には吉国・松・藤津の字があります。



## 2 天満宮(末光)

天満宮は現在は公民館の敷地になっていて、石祠のみを敷地の一角に残してあります。石祠には天神社・豊倉大明神・大神宮(伊勢神宮)・八天狗があります。



## 1 藤の森

藤の森がある一帯は字名が「藤津」と付いていて、藤津郡の地名のルーツではないかといわれています。藤津郡という地名の記録はかなり古く、奈良時代に編纂された「肥前風土記」の中に出てきます。その中には「日本武尊が船でこの地方を訪れた時に、日が暮れたので港に泊まった。翌朝見てみると、とも綱を大きな藤の木に繋いでいたので、この地を藤津(藤の港という意味)の郡」という記述があります。本当に日本武尊が来たのかはわかりませんが、古くは中川がこのそばを流れており、河口に大きな港があった可能性が高いこと、藤津という字名が残ることを考えると、可能性は高いと考えられます。現在藤の森にはこのことを顕彰して、鹿島藩主鍋島直彬が明治31年(1898)に建立した藤津の碑と藤の木が植えられ、鹿島市の史跡に指定されています。



## 3 三福寺

三福寺は浄土宗の寺です。もとは永禄年間(1558~1569)に安富氏の帰依寺として建立された専称寺の子院として建てられた寺です。安富氏は長崎県高来郡深江の領主でしたが、戦国時代の終わり頃、龍造寺隆信が島原を攻めた時、龍造寺氏側に加担しました。ところが隆信が戦死し、佐賀に引き上げたことから、安富氏も深江を追われ、龍造寺氏から深木村(現在の行成・末光)に領地をもらい、山浦に土着しました。その時に専称寺も深江から移り、新たに寺を造りました(現在の南川の源昌寺)。三福寺も一緒に鹿島に移ってきたのでこの寺が造られました。



# 馬渡



馬渡は江戸時代以前の史料には「馬渡分村」という名前で出てきます。現在の地名になったのは明治になってからのようです。元の地名には「分」の文字が付きますので、中世には「馬渡」氏の領地だったかもしれません。「馬渡」という姓は福岡・佐賀・長崎に多い姓です。馬渡には石木津・田原・古川・井手口・樋渡・山田・橋川の字があります。



## 1 天満宮(馬渡)

馬渡の天満宮はコンクリート造りの社殿の中に、元禄13年(1700)の銘がある「天満大自在天神」の石碑があります。石碑には、「菅原道真公の霊徳は、たとえば春には国の隅々の自然が光を放ち、その力が及ばないところはない。そのような力を感じて(建立した)」という意味の銘文が刻んであります。



## 2 観音堂

公民館の敷地には観音堂があり、子安観音がまつられています。明治末に現在の場所に移されたと言われます。敷地内には阿弥陀如来や十一面観音菩薩の霊場の石像もあります。



# 小舟津



小舟津は名まえのとおり「小さな港」という意味だと思われます。しかしながらその区域は中川と石木津川に挟まれた広い地域です。中川沿いの五町分村と石木津川沿い小舟津村が合併したものです。「五町分」とは「五町分の広さの干拓地」という意味です。大字重ノ木(旧重ノ木村)に属しています。字名には重ノ木と同じく「角」「籠」の文字が付く地名がすべてで、川良かわら籠かご・松角まつかく・杉角すぎかく・柿角かきかく・天神角てんじんかく・六角籠ろっかくごもり・五ノ松角ごのまつかく・瀬戸口角せとぐちかく・宗原角むねはらかく・中川角なかがわかくがあります。



## ① 天満宮(小舟津)

小舟津の天満宮は寛文11年(1671)の創建と伝えられます。堂内に木造の神殿があります。入口に建つ明神鳥居には正徳3年(1713)の銘があります。この他に豊倉大明神・海神社・天満宮の石祠があります。



昔の写真⑥ 鹿島町消防団



昔の写真⑦ 鹿陽館(映画)1953年ころ

# 犬王袋



犬王袋は鹿島川沿いに造成された干拓地などでできた集落です。変わった地名ですが、地名の由来はよくわかっていません。江戸時代前期の史料には現在と同じ字で「犬王袋村」として出てきます。寿福院が室町時代にさかのぼる寺院であることから、江戸時代以前の干拓地であると思われます。干拓当時は鹿島川に沿って、海に向かって袋状に突き出した干拓地だったのでそのような名前が付いたのかもしれませんが。字名としては千代丸角ちよまるかく・堂籠どうごもり・古川籠ふるかわごもり・森田角もりたかく・村中角むらなかかく・本田角ほんでんかく・柏角かしわかくがあり、地名のすべてに「角」と「籠」が付きます。



## ① 天満宮(犬王袋)

犬王袋の天満宮はコンクリートブロックの社殿の中に石祠等が納めてあります。祭神は石造の文官座像で菅原道真公の像と思われます。この他に稲荷大明神・豊倉大明神の石祠があります。



## ② 寿福院

寿福院は音成の竜源寺の俊翁祖大和尚てんぶんが天文17年(1548)に創建しました。本尊は延命地藏菩薩えんめいじぞうです。この他に観世音菩薩くわんぜいおんぼさつ・達磨大師だるまたいし・大権修理菩薩たいこんしゆりぼさつなどをまつります。また鐘は元禄12年(1699)に鑄造されたものです。この寺は大字重ノ木の中でも最も古く、中世にさかのぼります。



# 世間



世間は大字重ノ木の各地区と同じく干拓でできた地域です。貞享4年(1687)改元文3年(1738)の「御領中郷村帳」に「世間村」の記載があり、江戸時代の前期には村として成立しています。世間は干拓する前は海でしたが、その海中に瀬があり、その「瀬」が「陰(けわしい)」だったことから、「せけん」と地名が付いたという伝説があります。字名には大字重ノ木の他の地区と同じく「籠」「角」の地名がほとんどで、稲毛籠・新ヶ江籠・立角・三町分・地藏角・内間角・外牟田角・黒竹角・的場角があります。



## ① 天満宮(世間)

世間の天満宮は木造の小堂の中に木彫の文官像をまつります。また霊場の一つとして虚空蔵菩薩がまつってあります。またこの他弘法大師像・二十三夜講の勢至菩薩像・大悲観音像・地藏大菩薩の石祠があります。



## コラム 世間の「ハガマまつり」

毎年3月1日に世間地区で行なわれる行事で、ハガマの形をした盃で酒を飲み交わし、災難・厄除けを祈願するものです。これは『その昔日本武尊が藤津を訪れた時(藤の森の項参照)、干満の差が激しいのを見られて、「この地は瀬、陰なり」と言われたことから「世間」の地名が付いた。その時住民は濁り酒を釜で沸かしてもてなしたが、尊は面倒だと直接大釜から口づけでお飲みになった。』という伝説を起源として始まったまつりといわれます。

# 重ノ木



重ノ木は鹿島藩主の鍋島直朝が干拓地を築造し、「重ノ木籠」と名付けて、明暦2年(1656)より白石や世間の人たちを入植させたことから始まります。従って地区内の土地すべてが干拓地です。大字重ノ木(旧重ノ木村)は明治4年に重ノ木村・小舟津村・五町分村(現在の小船津の一部)・世間村・犬王袋村が合併したものです。字名には「〜角」「〜籠」と付く地名がほとんどです。「籠」は干拓地、「角」という地名は不正形だった干拓地などを区画整理して四角くした場所に付く地名です。重ノ木には江満角・新重ノ木・田崎角・清右工門籠・江副角・梅崎籠・秀籠・山田籠・十久間角の字があります。



## ① 天満宮(重ノ木)

重ノ木の天満宮は元禄5年(1692)の創建と伝えられます。社殿には菅原道真公の木彫座像の他、直朝神社がまつられ、神社であるものの勢至菩薩もまつられています。直朝神社の石塔は鍋島直朝の重ノ木籠築造に感謝して、地区民23人が寄進したものです。また境内には数多くの石祠があり、耕地整理の際に重ノ木地区内にあったものを集めてきたものと思われる。中には干拓の際の高潮などの災害よけとして、御髪大明神や和田津海の大神などをまつった石碑があります。



昔の写真⑧ 西牟田 御神松



昔の写真⑨ 田植風景